

学生の居場所・関わり・生きる場所

—「コミュニケーション教育」の批判的検討—

企画・司会：山地 弘起（大学入試センター研究開発部）

話題提供者：萩原 建次郎（駒澤大学総合教育研究部）

話題提供者：保崎 則雄（早稲田大学人間科学学術院）

指定討論者：Gehertz 三隅 友子（徳島大学教養教育院）

趣旨 社会人基礎力としてのコミュニケーション力を相対化し批判的に乗り越えていけるようなコミュニケーション教育は、どのように可能であろうか。本セッションでは、その答を探るために、若者の居場所研究、メディア文化研究、活動による学びの研究から多角的な議論を試みたい。

【居場所研究からの大学教育改善の視点】

萩原 建次郎

若者の居場所が社会課題となる背景には、日常世界の機能主義化や有用性重視の社会変容がある。それは人・物・情報の高い流動性を伴うグローバル社会化とリンクしながら、高度で機能的抽象的な言語コミュニケーション能力を若年層に要求している。一方、顔の見える地域コミュニティの衰弱と流動化は、「大人になること」への道筋を不透明化させ、かつコミュニケーションの質的側面においても脱状況化、脱身体化し、具体的状況を共有することで互いの意思を身体感覚として感じとる、コミュニケーションの遊び（冗長性）を奪っている。

このような日常世界の機能化、将来展望の不透明化、関係性の流動化と抽象化は、若者の生の基盤をより一層不安定で不確かなものにし、学ぶ意欲、他者への関わりへの意欲、ひいては生きる意欲を切り崩してはいまいか。そのような状況を踏まえた上で、若者の生の回復と存在充溢をもたらす場、学びの場をいかに構想できるか。いくつかのキーワード（身体、相互承認、偶発性、他者性など）を手がかりに事例をまじえながら考えたい。

【新たなメディア環境のもとでの「コミュニケーション能力」を問い直す】

田中 東子

近年、「コミュニケーション能力」という言葉が頻繁に用いられている。しかし、この言葉の内実については深く議論されないまま、一方ではこの曖昧模糊とした能力は就職活動をうまく乗り切るためのブラックボックスと化し、他方では大

学教育の現場に丸投げにされることで、大学の授業が浅薄な「アクティブ・ラーニング」へと変えられ、学生たちに必要な真の教養の獲得や学術的思考の深化を妨げる結果となっている。

本発表では、学術的な水準での「ディスカッション」を行うことが困難であるという学生たちへの聞き取り調査から、今日の大学での「コミュニケーション教育」において喫緊に必要なことは何であるのか検討していくための視点を提供したい。また、その際に、ICTとの接し方やインターネット空間での「コミュニケーション能力」との連関についても考察しておきたい。

【「ものづくり」の実践で「修正する」ことから学ぶ】

保崎 則雄

大学教育でのものづくりは、建築のようなものからプログラミング、教材制作など多岐に亘り、また増えている。共通するのは、そこでの教育的な評価については、圧倒的な成績評価者である担当教員が、授業で紹介された知識、スキル、作品について最終判断を下すという点である。

一方、大学外での活動ではそのような構図が成立していない。筆者が7年間関わる、ゼミ3年生の学外活動において、契約に基づいた「地方自治体から依頼された中小企業のPV制作」の社会実践におけるものづくりに大学生が参加する場合は、評価、批評、修正は契約相手方から来るものであり、行政や教員は制作活動には参加せず、評価もしない。金銭契約に基づくその仕事には納期があり、完成した映像の修正は複数回に及ぶ。3ヶ月から半年に亘るその修正作業に参加しながら、学生は迷い、依頼・指示に従い、かつ映像制作の意思にこだわりつつ、一般的な大学の授業では経験しない状況で、社会で生きる術も学び取る。そのような、大学に関わるが実際には学外でなされる社会活動を、従来の大学の授業とどのように関連づけるかを問題にしたい。